

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18320072
 研究課題名（和文） 東アジア残留日本語と日本語諸方言との関連にかんする研究
 研究課題名（英文） Correlations between Japanese Dialects and the Japanese Language Remaining in East Asia

研究代表者
 真田 信治（SANADA, SHINJI）
 奈良大学・文学部・教授
 研究者番号：00099912

研究成果の概要（和文）：アジア・太平洋地域には、戦前・戦中に日本語を習得し、現在もその日本語能力を維持・運用する人々が多数存在する。当該地域において日本語を第二言語として習得した人々を対象に現地調査を実施した。当該地域の話者が話す日本語には、言語としての合理化（簡略化）が進んでいる。また、現地音からの転移がそれぞれの日本語を彩っている。なお、居住していた母語話者の出身地とのかかわりで、台湾日本語は九州北部方言をベースとしたものになっており、サハリン日本語は北海道方言をベースとしたものになっている。

研究成果の概要（英文）：In some parts of Asia and the Pacific Ocean, there are a number of speakers who acquired Japanese before or during the WWII, and who still maintain and even have a command of spoken Japanese until today. This project conducted fieldwork in these areas towards speakers of Japanese as a second language. Generally speaking, simplification is observed in the Japanese language. Language transfer from Japanese is one of the characteristics. It is, in fact, observed in the adoption of the dialectal features of the Japanese residents in the area. For instance, Taiwan Japanese is established on the basis of Northern Kyushu dialects. In the same way, Sakhalin Japanese was developed in relation to Hokkaido dialect.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,900,000	0	4,900,000
2007年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2008年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2009年度	2,500,000	750,000	3,250,000
年度			
総計	14,300,000	2,820,000	17,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：①言語学 ②国語学 ③残存日本語 ④方言分析 ⑤言語接触

1. 研究開始当初の背景

アジア太平洋地域には、戦前・戦中に日本語を習得し、現在もその日本語能力を維持・運用する人々が多数存在する。しかし、彼らの多くが75歳以上の高齢に達しており、その日本語運用データの収集はまさに緊急を要する。現在これらの地域に居住するかつての日本語学習者はどのような種類の日本語を使っているのか。これは、言語の習得・維持・後退にかかわる研究に幅広く貢献するはずの課題である。特に半世紀以上にわたる第二言語の維持といった事象を取り上げて研究対象としたものは世界的にもほとんど例を見ない。

2. 研究の目的

(1) 日本語習得環境：植民地・支配地で行われた戦前・戦中の日本語教育はどのようなものだったのか。また、日本語習得環境として学校以外にどのような場所があったのか。それらの場所での日本語との接触状況はどのようなものだったのか。

(2) 日本語の社会的役割：地域の言語生活において、当時の日本語が果たした社会的な役割はどのようなものだったのか。また、その後あるいは現在、日本語が果たしてきた／果たしている社会的な役割はどのようなものなのか。

(3) 日本語の維持状況：日本が撤退して数十年が経過したが、現在これらの地域に居住するかつての日本語学習者たちはどのような種類の日本語を維持しているのか。

3. 研究の方法

当該地域において日本語を第二言語として習得した人々を対象にフィールドワークを実施し、コーパス（談話資料）を作成して、それを分析しつつ、「研究の目的」に記した課題群を分析する。

4. 研究成果

(1) 日本語習得環境について：考えられる要因には、次のようなものがある。①習得開始の年齢が8歳前後の言語形成期間中であったこと。習得のあるレベルを超えると第二言語は衰えないと言われるが、当該地域の日本語話者の多くはすでにこのレベルを超えていたものと思われる。②これら地域の日本語

が外国語ではなく彼らの第二言語であり、母語話者が多数居住していたこと。③学校での教育がすべて日本語で行われ、学校で日本語以外の言語を話すことが罰が与えられたこと。

(2) 日本語の社会的役割について：当時、社会で活動するためには日本語が前提となっていた。そして、学ぶ側にもその要求が（強制されたものであったとしても）存在した。戦後は、台湾やミクロネシアなどで異なる母語を異にする人々の中でのリンガフランクカとして用いられ続けている（台湾の一部ではクレオールが形成された）が、それ以外には日本語はどの地域においてもほとんど運用されず現在に至っている。（ただし、台湾の原住民族諸語やミクロネシアの諸言語にはかなりの日本語が借用されている。）

(3) 日本語の維持状況について：これらの地域の話者が話す日本語には、言語としての合理化（簡略化）が進んでいる。また、現地音からの転移がそれぞれの日本語を彩っている。なお、居住していた母語話者の出身地とのかかわりで、台湾日本語は九州北部方言をベースとしたものになっており、サハリン日本語は北海道方言をベースとしたものになっている。ただし、日本語能力に関しては、話者による個人差が各地ともに著しい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

- ① Yoshiyuki ASAHI、On the relationship of two Japanese regional koines: evidence from pitch-accent patterns in Karafuto and Hokkaido Japanese, Proceedings of METHODS, 査読有、XIII、2010、321-330
- ② 真田信治・簡月真、台湾における日本語クレオールについて、日本語の研究、査読有、4-2、2008、69-76

〔学会発表〕（計10件）

- ① 朝日祥之、北海道・サハリンにおける言語景観、富山大学・日本海総合研究プロジェクト、2010.1.23、富山大学人文学部
- ② 真田信治、東アジア残留日本語と日本語諸方言との相関にかんする研究、国際学術シンポジウム、2007.11.3、韓国・中央大学校日本研究所
- ③ 真田信治、第二言語の維持と変容—残留日

本語の場合一、2007 年日語教学国際会議、
2007. 4. 28、台湾・東呉大学日本語文学系

[図書] (計 2 件)

- ①簡月真・真田信治 (編)、奈良大学文学部
真田研究室、台湾「宜蘭クレオール」の基
礎語彙集、2010、233
- ②真田信治、和泉書院、越境した日本語一話
者の「語り」から一、2009、128

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

真田 信治 (SANADA,SHINJI)
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：00099912

(2) 研究分担者

水野 義道 (MIZUNO,YOSHIMICHI)
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・
准教授
研究者番号：60190659

中井 精一 (NAKAI,SEIICHI)
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：90303198

ロング ダニエル (LONG,DANIEL)
首都大学東京・オープンユニバーシティ・
准教授
研究者番号：00247884

鳥谷 善史 (TORITANI,YOSHIFUMI)
天理大学・文学部・講師
研究者番号：30412133

朝日 祥之 (ASAHI,YOSHIYUKI)
国立国語研究所・時空間変異研究系・
准教授
研究者番号：50392543

松丸 真大 (MATSUMARU,MICHIO)
滋賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：30379218

(3) 連携研究者
なし